

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

吉永小百合さんに「ニアミス」

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」
編集長・真鍋康利さん



先日、テレビで吉永小百合さんを拝見しました。1945年の東京大空襲の3日後のお生まれとのことなので、後期高齢者目前です。しかし、背筋の伸びた立ち姿や歩く姿勢はとてもしゃまません。「サユリスト」と呼ばれるのは私より少し年長者で、職場にもそう自認する先輩が大勢いました。私自身、サユリストではなかったのですが、若いころ彼女に「ニアミス」したことを思い出しました。



東京で会社勤めをしていた30代前半、小遣いが乏しい中、仲間と行く店が西新橋にありました。大おかみと我々より少し年上の若おかみの母娘だけの店で、しがない勤め人がお酒と気の利いた肴、そして会話を楽しんでいました。

ある日、店の隅にあった小百合さんと若おかみが一緒に写った写真に気付きました。唄の発表会で撮ったといい、当然その日は小百合さんの話題で盛り上がりました。それまで熱烈なファンではなかったものの、当時のドラマ「夢千代日記」だけは欠かさず見ていました。陰のある風情が素敵だったからです。

そのうち「昔はもうひとつだったけど、今は最高だ！これはあの岡田太郎という15歳

も年上のおっさんと結婚して磨かれたからに違いない」と口走っていたのです。



カウンターの端に、ニコニコしながら聞いている和服の粋なおばあさんがいました。たまに見かけますが、話したことはありません。その彼女が驚くことに、「ビール、どうぞ」と瓶を差し出し、さらに大おかみに「何かおいしいおつまみ出してあげて」と。「ごっそさんです」とお礼を言ってお飲み干すと、「さっきの話、もう一回聞かせて」と言います。酔いにまかせて「憎たらしいけど、あのおっさんに脱帽！」と繰り返し、

小百合さんの定席という椅子に頬ずりまでしたのです。すると、また注がれます。

そのとき大おかみが一言、「あなた、よかったね、悪口言わないで」。なんと彼女は岡田太郎氏の母君だったので。すく近くに住み、夕食はいつもこの店でとる。唄の師匠で、小百合さんと若おかみがそのお弟子さんとのこと。

世のサユリストたちは岡田氏をうらやみ、恨み、かたきのように言う客の方が多いらしい。そこへひたすら褒める若者の登場、これはごちそうするしかない、ということだったようです。残念ながら一度も小百合さんにお会いできませんでしたが、我が息子の誕生の際にもらった色紙は今も宝物です。

これからもますます磨きのかかった演技と凜とした美しさを見せていただけるものご期待してやみません。